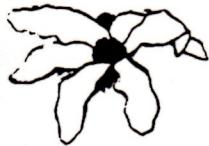


尾瀬の自然



(題字 初代環境庁長官 大石武一氏)

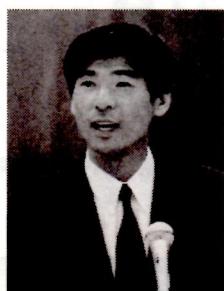
1994年 夏 号

人・人・人の尾瀬ヶ原



6月の第2土曜日（学校休校日）はオーバーユース ('94.6.11 撮影・梅山 久夫)

尾瀬の自然を守る会



講演中の名塚秀二氏

初めての山は尾瀬だつた

うようになつた。自力で登つた満足感が忘れられず、山にめり込んでいくうち、より高い山を目指すようになり、日本アルプスへの単独行が多くなつたという。

穂高や谷川で岩登り姿の登山者を見ているうち、格好よいように語つた。

初めての山は、社会人二年目の二十歳の夏、先輩に誘われて三平峠を越えて尾瀬へハイキングしたことだった。その後、至仏山や燧ヶ岳に登るうち、「山つていいなあ」と思

を一回で終わつてはならないと思つたとか。

その後、アンナブルナ、サガルマータ、マナスル、チョゴリ、カンチエンジンガ、チヨー・オユーの登頂を経て九三一九四冬にサガルマータ南西壁（八八四八m）の登頂に成功。世界のビッグ3登頂者に名を連ね、八〇〇〇m峰四座、五回の登頂記録を保持している。

石塚氏は一九五四年、福岡県田川市生まれ。七四年、東京農大二高卒。前橋市在住。

事務局を東京から群馬県月夜野町へ移転したのを機に、群馬県の尾瀬愛好者を中心には講演と現状報告を行おうと、

五月二十一日（土）午後二時から前橋市中央公民館四階ホールで第15回「尾瀬の夕べ」が開催され、地元の守る会の会員や一般が多数参加し

た。梅山久夫・総務部長の司会で、まず内海廣重代表があい

建設阻止を実現させた。以来二十三年目を迎えるたび事務局を尾瀬の地元に移転した。オーバーユースなどから、真剣に尾瀬の利用法を検討すべきであるなどを述べた。

次いで招待講演者の登山家・名塚秀二氏（群馬県山岳

連盟冬期サガルマータ南西壁登山隊登はん隊長）が「エベレストに魅せられて」と題して講演。

しめくくりに青木安弘・事務局長が、守る会が昨年提唱した「保護と利用のためのマスタープラン」を中心に、尾瀬の保護についての現状報告を行つた。

◆二月六日「朝日新聞」群馬版
「ひと」欄で内海代表を紹介。一九九二年度から小学六年の教科書に「尾瀬」が取り上げられたことにより、教員向けの尾瀬勉強会が必要だ、と代表は語つていて。

◆二月二十五日「毎日新聞」全国版
「ひと」欄で内海代表を紹介。

一九九二年度から小学六年の教科書に「尾瀬」が取り上げられたことにより、教員向けの尾瀬勉強会が必要だ、と代表は語つていて。

◆三月四日「読売新聞」群馬版
「尾瀬保護財団」設立のニュース。五段記事。環境庁と三県三村が平成七年度に設立を合意した。群馬県は、これを受けて山の鼻のビジターセンターに専門職員を増員する計画に乗り出した、とある。

◆三月五日「朝日新聞」群馬版
「尾瀬保護財団」九五年度に設立の報道、七段記事。これは従来からある尾瀬地区保全対策推進連絡協議会路線の発想に立つもので、現状維持が目的。

◆三月九日「読売新聞」群馬版
守る会の事務局、月夜野移転を報ずる三段記事。地元密着の活動を進めること。

◆三月九日「上毛新聞」

守る会事務局月夜野移転を告げる三段記事。また今年の入山指導の日程（六／三八／十六まで）も発表されている。

前橋で「尾瀬の夕べ」

—事務局の移転を記念して—

◆一月一日「読売新聞」群馬版

「新ぐんま人、二〇〇万人の履歴書、郷土支える夢追い人」として、内海代表を五段抜きで紹介。

◆一月十日「毎日新聞」群馬版

「やさしくうたつて、再生への発信」（5）として、内海代表のインタビュー記事七段。尾瀬ヶ原への入山制限のためにアヤメ平を観光客に開放しよう、という内海氏の「逆転の発想」が語られている。

◆二月六日「朝日新聞」群馬版

「ひと」欄で内海代表を紹介。

一九九二年度から小学六年の教科書に「尾瀬」が取り上げられたことにより、教員向けの尾瀬勉強会が必要だ、と代表は語つていて。

◆三月四日「読売新聞」群馬版

「尾瀬保護財団」設立のニュース。五段記事。環境庁と三県三村が平成七年度に設立を合意した。群馬県は、これを受けて山の鼻のビジターセンターに専門職員を増員する計画に乗り出した、とある。

◆三月五日「朝日新聞」群馬版

「尾瀬保護財団」九五年度に設立の報道、七段記事。これは従来からある尾瀬地区保全対策推進連絡協議会路線の発想に立つもので、現状維持が目的。

◆三月九日「読売新聞」群馬版

守る会の事務局、月夜野移転を報ずる三段記事。地元密着の活動を進めること。

◆三月九日「上毛新聞」

守る会事務局月夜野移転を告げる三段記事。また今年の入山指導の日程（六／三八／十六まで）も発表されている。

◆三月九日「上毛新聞」

守る会事務局月夜野移転を告げる三段記事。また今年の入山指導の日程（六／三八／十六まで）も発表されている。

冬期利用状況報告

梅山 久夫

今年で尾瀬の冬期利用実態調査は6回目に

ない場合は登山をご遠慮下さい。

片品村 片品村遭難対策救助隊

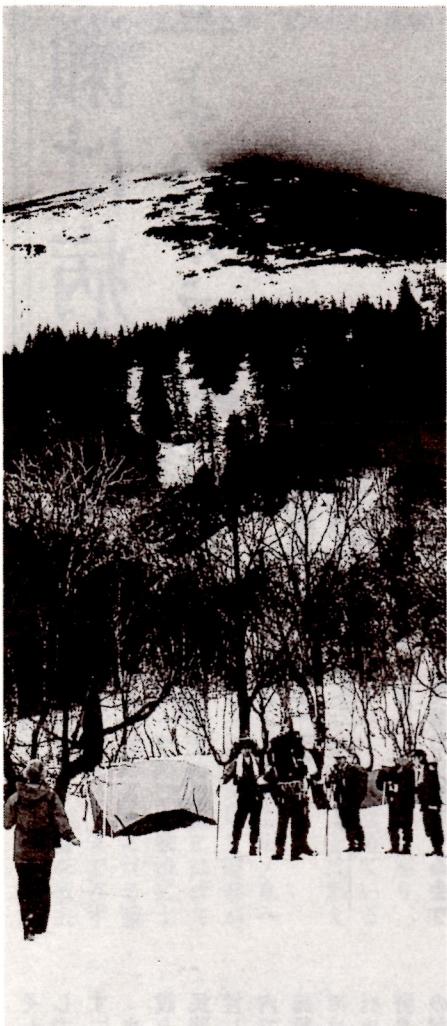
5月5日に、鳩待峠から至仏山に調査予定だったが、低気圧の影響で頂上付近にガスがかかっていたため、予定を変更して、鳩待峠から山の鼻を調査した。

メンバーは、内海代表、平井、石島、川島、永島、荻原、広岡、宮川、梅山の計9名の指導員が参加した。

連休中の天気予報は、後半の4日、5日は天気がくずれるとの予報どおり、5日の早朝、片品村戸倉に集合した時は曇りだった。鳩待峠に向かった。

5月1日から運転を始めた会員制バスに乗り予想していたより、マイカーの駐車が少なかった。やはり天気がくずれるとの予報を聞いて日帰り組が予定を変更したためではないか。この時期の尾瀬にとって大変良い事だと思う。至仏山の登山口には、「至仏山はまだ残雪があり登山道が不明瞭なので経験者の同行が

(要望書の詳細は会報第65号参照)



という看板が設置されていた。頂上より山の鼻の立入り禁止地区に山スキーで滑ることについては何も述べていない。

山の鼻地区の山小屋は例年通り営業を開始していた。一部の山小屋は無神経にも屋外スピーカーのボリュームを上げて、音楽を流し続けていた。まるでスキーゲレンデの感じである。

5月下旬の山開きまでの間は、静かな環境にしておく必要があり、現状は極めて好ましくない状況になっている。早急に実施すべき対策として、守る会は昨年の5月17日に、環境庁日光国立公園管理事務所へ要望書を提出したが、なんら改善されていない。

冬期の尾瀬は無規制、無指導状況にあり、この現況を放置すれば環境はますます悪化の道をたどるほかない。

◆三月九日「上毛新聞」アヤメ平で約40ヘクタールにわたり樹木の立ち枯れがあることのニュース。これは主に南東側の斜面でオオシラビソが被害にあっている。首都圏の大気汚染物質を含んだ酸性雨や酸性霧の影響ではないかと、発見した前橋市「森林(やま)の会」は言っている。

◆三月二十四日(木)「上毛新聞」四月一日からスタートする群馬県環境局の関係記事で、ほぼ一頁特集をしている。

◆四月四日(月)「朝日新聞」群馬版 初代群馬県環境局長中島信義氏紹介記事。

環境問題は役所がいくら力んでもだめ。市民に参加してもらわないといけない。県民の皆さんと一緒に考えていくこと。そのため積極的に戸外に出ていく」とのこと。

◆四月十三日(水)「下野新聞」教壇に別れを告げた内海代表の紹介コラム記事。(共同配信)

◆四月十七日(日)「サンケイ」群馬版 尾瀬保護財団やつと来年スタートの開み七段組み記事。基本財産は十億円というが、どういう形で集めるか、入山料も検討課題に上がりそう。

◆四月二一日(木)「毎日新聞」群馬版 群馬、栃木県境の若木立ち枯れの写真入り記事。日光、男体山、白根山から尾瀬アヤメ平までの周辺で、オオシラビソやコメツガの若木が立ち枯れている。首都圏の大気汚染の影響度を科学的に調査する必要がある。

◆四月二二日(金)「サンケイ」群馬版 尾瀬ヶ原下田代の草原化の恐れが福島大学の権利教授の調べで分かつたが、人の手は加えるべきではない、とする記事。

◆四月二十四日(木)「サンケイ」群馬版 八段組み記事。水上町観光協会が新幹線上毛高原駅から一日一便、会員制バスを鳩待峠に走らせるというもの。この六月から「ライナー」と名付けてスタートする。

ニュース・ラウンジ

加藤久晴 (かとう・ひさはる)

1937年東京生まれ。

1960年早大文学部卒業、日本テレビ入社。
現在、同社ディレクター、文化女子大講師。

おもな著作に「痙攣」(1961年芥川賞候補)、

「追いつめられた少年たち」、「遙かなるガ
ンダーラ」(共著)がある。

尾瀬は病んでいる

2

よみがえれ尾瀬

加藤 久晴

自然保護運動のパイオニア

——「尾瀬の自然を守る会」の活動——

山小屋撤去を主張 その後、「尾瀬の自然を守る会」
は、現地指導、行政へのクレーム、

要望、働きかけ、世論へのアピール、さまざまな講座、
例会、会報発行など活発な活動を繰り広げてきたが、近
年、もっとも注目されたのが「二十一世紀に引き継ぐた
めに——尾瀬の保護についての提言——」の発表であろ
う。全文を付録として巻末に転載するが、「守る会」は、
このなかで尾瀬の現状と将来に深い憂慮を示し、大胆で
抜本的な解決策を具体的に提示している。

「提言」のなかでもっとも問題になり、意見が分かれ
るのは、(1)の山小屋移転問題であろう。このなかで「守
る会」は、湿原や沼の富栄養化の原因となっている山小
屋、キャンプ場などは尾瀬の稜線外へ移転させ、稜線内
には最低必要な避難・休憩施設だけとする、と提言して
いる。つまり、稜線内で営業している一六軒の山小屋の
移転を求めているわけだから、営業権の問題をふくめ山
小屋サイドにとっては重大な内容である。提言の発表に
あたって内海事務局長は、この提言について環境庁記者
クラブでの会見で次のように補足した。

「尾瀬が、現在、とくに水の問題を中心にして汚染が
呼ばれているとき、やはり、それを抜本的に直すために
は、山小屋の人たちにも長いあいだご苦労いただきまし
たけど、このさい、ただ出てほしいということじやなく
て、國ももちろん国民的な運動を盛り上げていただいて、
國ももちろん国民的な運動を盛り上げていただいて、

そして話し合いのうえですね、そういうことを解説
していかなければいけない時期にきていくと思うんで
す」

また、小屋関係者の生活権にかんしては、公営宿泊施
設と東電関連企業の尾瀬林業が経営する山小屋を除いて
民間の小屋の大部分は戸倉や檜枝岐で旅館やホテルを經
営しているので、問題は解決されるはずだという。稜線
内で泊まれなくなれば必然的にハイカーはふもとの宿泊
施設へ流れるから、小屋を下へ移しても営業が可能なの
ではないか、と「守る会」ではみている。

一九七一年の自動車道建設反対運動の中心に立った平
野長靖氏は皮肉なことに、当時、山小屋の経営者だった平
野のだが、生前、内海氏は高校の同級生でもあった平野氏
に、

「ほんとうに尾瀬を守るために長蔵小屋をつくめ
山小屋を取り払わざるをえないときがくるかもしれない
が……」
と言ふと、

「覚悟はできている」

と答えたという。つまり、平野氏は、尾瀬の自然保護運
動は初めは自動車問題であるが、次は小屋の問題になる
ということを予測していたのだという。

「守る会」の小屋撤去にかんする提言にたいしては、
当然ながら山小屋関係者のあいだから反発が出ていいの
だが、「尾瀬山小屋組合」の組合長であり、尾瀬林業の
戸倉支社長でもある須田敏男氏に、提言についての見解
を聞いてみた。ちなみに、尾瀬林業は、尾瀬の群馬県側
の土地の大半を所有している東京電力の子会社で、稜線
内に五軒の山小屋を経営している。

「山小屋の人たちはPRは下手なんですが、実際に
尾瀬を守っているのは自分たちであるという自覚を持つ
ています。もちろんわれわれが食うための、自分たちの
自然ですから、守らなくてはいけないということは外部
から言われるまでもなく山小屋の人たちがもつとも痛切
に感じていますし、守つていかなくちゃいけないと考
えています。ですから、山小屋が稜線のなかにあるとそれ

前号までの大石武一氏の『尾瀬までの道』の連載(抜粋)に引き続き、本号からは加藤久晴氏の著作『尾瀬は病んでいる』(1987年、大月書店刊)を連載する。加藤氏は日本テレビのディレクターとして、長年にわたって尾瀬の自然保護を訴えてきた。同書はテレビ取材の記録をもとに、データを大幅に加えて執筆されたもの。この会報では同書の中から第5章「よみがえれ尾瀬」のみを抜粋して紹介する。(編集部)

が公害の元凶だと言われるのは心外ですね」

他の山小屋関係者にも三人ほどに聞いてみたが、共通しているのは、山小屋がこれまで尾瀬の自然を守つてきただ、山小屋が撤去されたら尾瀬はもっと荒れるだろう、という二点であった。たしかに、山小屋関係者のなかには、シーズン中に鳩待峠でゴミ袋を配つたり、登山道でゴミ集めをしたり、不心得なハイカーに注意をしたりしている人たちもいる。また、館内のスピークーで尾瀬の自然保護についてハイカーに協力を求める放送をしている山小屋もある。しかし、問題はそうした個々の意志や善意を超えた時点にまで事態が悪化してしまったという

木道の大渋滞

じつさい、シーズン中の尾瀬の山小屋

はすさまじいばかりの大混雑である。

年間を通じて尾瀬がもつとも混雑するのはミズバショウシーズンの六月第一週の週末といわれているのだが、その時期を狙つて取材に出かけてみた。

鳩待峠から入つたのだが、ここは朝から大混雑である。空地をビッシリ埋めたマイカー、旅館やペンションの名を記した送り迎えの車。客待ちをしているタクシーやの列。ピストン輸送でハイカーを運んでいるマイクロバス。ここには山小屋と売店があるが、その売店と隣の食堂もハイカーで超満員。さらに外には、テント張りの売店まで出ていて、ここではなんと、ソフトクリームまで売っている。おばさんハイカーの群れが地べたに座り、だらしなく足を投げだしてソフトクリームをなめている光景は、とても標高一六〇〇メートルの山の上とは思えない。

ゴミ持ち帰りを呼びかける横断幕をくぐつて山ノ鼻へ

下りる道に入る。たしかに尾瀬ではゴミ持ち帰り運動が定着したように見えるし、登山道や木道の周辺にはゴミが目につかない。尾瀬のゴミ持ち帰り運動は逆療法によって成功したといえる。休憩所や山小屋の近くにゴミ籠を置くと、たちまちいっぱいになりそのままわりまでうず高くゴミが捨てられる。そこでいっさいのゴミ籠を撤去し、ハイカーにゴミ持ち帰りを呼びかけた。これが成功

した。捨てる場所がなければ持ち帰るのである。ただし持ち帰ると、それでもふもとの町か近くの駅や高速道のサービスエリアくらいまで、これらの場所に置かれているゴミ箱はハイカーが捨てたゴミ袋であふれかえっている。

もつとも、稜線内にしても、自然保護関係者に言わせると、ゴミがないのは目につく範囲だけで、少し山のなかに入ると木陰などにゴソソリとまとめて捨ててあるといふ。また、木道の下などにもかなりの量のゴミが突っ込まれている。さらに、積雪期にクロスカントリーなどで入ってくるスキーヤーは雪のなかにゴミを埋めて帰る。雪どけとともにそれらのゴミが湿原のあちこちに散らばっているという。

およそ一時間の歩きで山ノ鼻へ着く。ここも週末の新宿歌舞伎町なみの大混雑である。携帯用ステレオカセットのボリュームを上げてロックを聞いている者もいる。音楽にさえぎられて鳥の声は聞こえず、鳥も恐れて逃げていく。尾瀬でラジカセを聞きながら歩いているハイカー、黒短やハイヒールで入ってくるハイカー、団体で来るハイカーを、地元の人は「尾瀬の三馬鹿」と呼んでいる。

混雑を避けて早々に山ノ鼻を退散すると、こんどは木道が首都高速なみの大渋滞。人、人、人で延々とつながっている。途中で背景を眺めたり、写真を撮つたりするために一人が立ち止まると渋滞はさらにひどくなる。これでは人間の尻を見にきたようなものである。なんのために都会の雑路を逃れ尾瀬までやってきたのかわからぬ。



ヒメシャクナゲ

「守る会のみなさんへ」

愛媛県・参川小から励ましの便り



藤岡 崇

藤崎ますみ

川小学校6年生の児童15人から「守る会のみなさんへ」との励ましの便りが届きました。それで、それぞれの一部を抜粋して紹介します。昨年12月に到着したのですが、都合で掲載が遅れました。したがって、便りをくれた子供さんたちは、現在は中学生ということがあります。

皆さんで便りをくれるきっかけとなつたのは、「愛媛新聞」に東京農大一高生物部が

尾瀬で行つた登山道周辺の樹木の調査で、立ち枯れが進んでいることが分かつた――といふ記事です。これについては、子供さんたちの便りをまとめ送つて下さつた城戸先生のお便りに詳しく書いてありますので、同時掲載します。

城戸先生、生徒の皆さんに、厚くお礼申し上げるとともに、

ご期待に副うよう会員一同、

いつそつ努力をすることをお約束します。

なお、同小学校のある小田

町は最寄り駅のJR予讃本線内子駅から東へ直線で15キロほど四国山地に向かつた所の

ようです。

(編集部)

生き方、考え方には深く感動し、自然も人間も共に生きるために方策を練つたところを、何度も何度も読み返しました。

そんな折、12月5日の「愛媛新聞」に「尾瀬の樹木危ない!!」という見出しの記事を見つけたのです。何となくとくに、身近な問題として自分なりにとらえようとしているのが、私にもわかりました。ぜひ「尾瀬の自然を守る会」へおたよりしようといふ声も上がり、早速ペンを執った次第です。子供の中には、尾瀬には行けないけれど、せめて励ましてあげたいという声が多くありました。遠くからもありますが、応援いたします。

日本の自然を守るために、

今後ともご活躍をお祈り申し上げます。

平成5年12月23日

小田町立参川小学校

城戸 敬幸

師走の候、ますますご健勝ご活躍のこととお慶び申し上げます。

愛媛県上浮穴郡小田町立参

川小学校6年生の児童15人から

「守る会のみなさんへ」との

励ましの便りが届きました。

それで、それぞれの一部を抜粋して紹介します。昨年12月に

到着したのですが、都合で掲載が遅れました。したがつ

て、便りをくれた子供さんたちは、現在は中学生というこ

とにあります。

皆さんで便りをくれるきっ

かけとなつたのは、「愛媛新聞」に東京農大一高生物部が

尾瀬で行つた登山道周辺の樹木の調査で、立ち枯れが進んでいることが分かつた――といふ

記事です。これについては、子供さんたちの便りをまとめ送つて下さつた城戸先生のお便りに詳しく書いてありますので、同時掲載します。

城戸先生、生徒の皆さんに、厚くお礼申し上げるとともに、

ご期待に副うよう会員一同、

いつそつ努力をすることをお約束します。

なお、同小学校のある小田

町は最寄り駅のJR予讃本線内子駅から東へ直線で15キロほど四国山地に向かつた所の

ようです。

(編集部)

池田 聰

城戸 敬幸

ぼくは「守る、みんなの尾瀬を」を見て感動しました。その理由は、長靖さんが尾瀬

のために、いろいろな活動をしたことです。

守る会のみなさん、これから美しい尾瀬を守つていってください。今、ぼくたちの

学校では緑の少年団というのがあります。これから活動しながら、(自然を)きれいに

研究するまでは知りませんでした。

子供たちは、平野長靖氏の生き方、考え方には深く感動し、自然も人間も共に生きるために方策を練つたところを、何度も何度も読み返しました。

そんな折、12月5日の「愛媛新聞」に「尾瀬の樹木危ない!!」という見出しの記事を見つけたのです。何となくとくに、身近な問題として自分なりにとらえようとしているのが、私にもわかりました。ぜひ「尾瀬の自然を守る会」へおたよりしようといふ声も上がり、早速ペンを執った次第です。子供の中には、尾瀬には行けないけれど、せめて励ましてあげたいという声が多くありました。遠くからもありますが、応援いたします。

ぼくたちも自然が大好きです。こちらにも「小田深山」があり、秋にはモミジがきれいでいます。ここには自然に生えた木もあります。

妹が片言で「トンボ、トンボ」といつて、つかまえようとしたところ、長靖さんは「さわづちやだめだよ。トンボがおどろいてしまうよ」と、やさしくいいました。そんな長靖さんは、みんなにわる者あつかいされても、尾瀬の自然を守りました。ぼくが長靖さんだったら、もうやめたと思います。でも、長靖さんはあきらめず尾瀬の自然を守つたから、すごいなあと思います。

今は守る会のみなさんがいるから、尾瀬もきれいです。これからも、がんばってください。

城戸 祐樹

大倉 万幾子

永居 和也

長靖さんは、みんなにわる者あつかいされても、尾瀬の自然を守りました。ぼくが長靖さんだったら、もうやめた

と思います。でも、長靖さんはあきらめず尾瀬の自然を守つたから、すごいなあと思います。

今は守る会のみなさんがいるから、尾瀬もきれいです。これからも、がんばってください。

成田 幸二

尾瀬を守る会のみなさん、

尾瀬をちゃんと守つています

か。ぼくは自然を守つていくことは、いいことだと思います。

私の住んでいる所は「小田町」という所です。道路を新しくつくるので、田がなくなつたときは、とても悲しい気持ちになりました。泉がなくなつた時の長靖さんの気持ちが分かつたように思います。

ぼくは「守る、みんなの尾瀬を」を見て感動しました。その理由は、長靖さんが尾瀬

のために、いろいろな活動をしたことです。

守る会のみなさん、これから美しい尾瀬を守つていってください。今、ぼくたちの

学校では緑の少年団というのがあります。これから活動しながら、(自然を)きれいに

研究するまでは知りませんでした。

子供たちは、平野長靖氏の生き方、考え方には深く感動し、自然も人間も共に生きるために方策を練つたところを、何度も何度も読み返しました。

そんな折、12月5日の「愛媛新聞」に「尾瀬の樹木危ない!!」という見出しの記事を見つけたのです。何となくとくに、身近な問題として自分なりにとらえようとしているのが、私にもわかりました。ぜひ「尾瀬の自然を守る会」へおたよりしようといふ声も上がり、早速ペンを執つた次第です。子供の中には、尾瀬には行けないけれど、せめて励ましてあげたいという声が多くありました。遠くからもありますが、応援いたしました。

ぼくたちも自然が大好きです。こちらにも「小田深山」があり、秋にはモミジがきれいでいます。ここには自然に生えた木もあります。

妹が片言で「トンボ、トンボ」といつて、つかまえようとしたところ、長靖さんは「さわづちやだめだよ。トンボがおどろいてしまうよ」と、やさしくいいました。そんな長靖さんは、みんなにわる者あつかいされても、尾瀬の自然を守つたから、すごいなあと思います。

今は守る会のみなさんがいるから、尾瀬もきれいです。これからも、がんばってください。

私は尾瀬に行つたことないけど、「守る、みんなの尾瀬を」を読んで、この自然はとても大切だということがよく伝わってきました。

私の住んでいる所は「小田町」という所です。道路を新しくつくるので、田がなくなつたときは、とても悲しい気持ちになりました。泉がなくなつた時の長靖さんの気持ちが分かつたように思います。

ぼくは「守る、みんなの尾瀬を」を見て感動しました。その理由は、長靖さんが尾瀬

のために、いろいろな活動をしたことです。

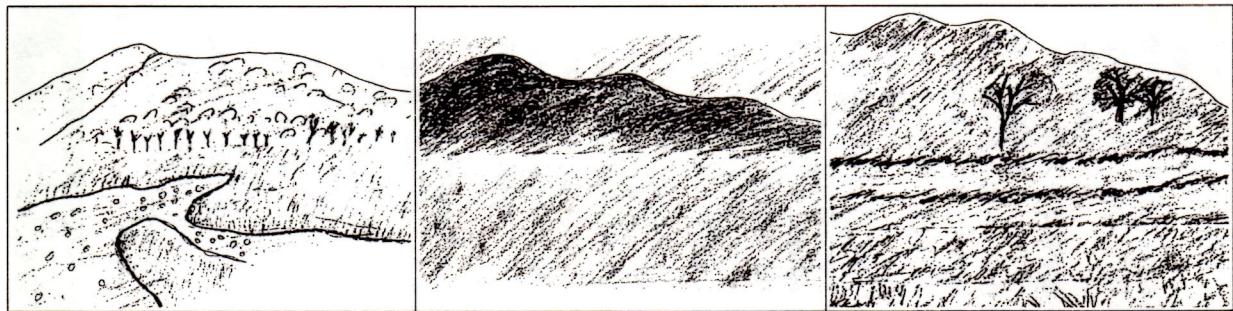
守る会のみなさん、これから美しい尾瀬を守つていってください。今、ぼくたちの

学校では緑の少年団というのがあります。これから活動しながら、(自然を)きれいに

研究するまでは知りませんでした。

子供たちは、平野長靖氏の生き方、考え方には深く感動し、自然も人間も共に生きるために方策を練つたところを、何度も何度も読み返しました。

そんな折、12月5日の「愛媛新聞」に「尾瀬の樹木危ない!!」という見出しの記事を見つけたのです。何となくとくに、身近な問題として自分なりにとらえようとしているのが、私にもわかりました。ぜひ「尾瀬の自然を守る会」へおたよりしようといふ声も上がり、早速ペンを執つた次第です。子供の中には、尾瀬には行けないけれど、せめて励ましてあげたいという声が多くありました。遠くからもありますが、応援いたしました。



村山真弘

大倉万幾子

長谷美由紀

す。ぼくは尾瀬に行つたことがありません。だけど尾瀬はきれいな所だと思います。

ぼくは「守る、みんなの尾 藤岡 崇

だつたら守ろうとしても統かないと思いました。
がんばって尾瀬を守つてあげてください。ぼくも尾瀬に
いってみたいです。

からも尾瀬の自然を守り続け
てください。

ぼくたちは五年のとき緑の少年団で山にのぼりました。自然を守ることは、たいへんだなあと思いました。これからも長靖さんにつづいて、尾瀬を守つていってください。

瀬を」を読んで、自然を守る会の人たちや、いろいろな人たちが尾瀬を守っていることを初めて知りました。

げてください。ぼくも尾瀬に
いってみたいですね。

西森 真澄 尾瀬は、守る会の人たちに
よって守られてきました。だから尾瀬はとてもきれいな所だと思います。私もそんな尾瀬を一度、見てみたいのです。
尾瀬にはたくさんの自然があります。その自然を、これからずっと守っていくのは、たしかに大変なことです。でも、この自然を守ることで、私たちの子供たちや孫たちが、いつまでもこの美しい自然と触れ合えるように、守らなければなりません。

私は「守る、みんなの尾瀬を」を学習して、長靖さんや「自然を守る会」のみなさんが、美しい尾瀬の自然を守りより美しくしていくから、美しい自然がのこつているんだとおもいます。

小田町にも、まだきれいな自然がのこっています。私は自然や動物がとっても好きです。これからも、がんばって保護をつづけてください。

私は、尾瀬に行つたことはありません。でも「守る、みんなの尾瀬を」を読んで、とても美しい所なんだな、と思いました。尾瀬は四方を山に囲まれた二つのくぼ地から成り立つてゐるそうですね。岸辺からそびえ立つ燧ヶ岳も標高二三五六メートルもある

長靖さんは、自然か人間かどちらを選ぶかと言われば「自然がどれだけ美しく、人間がどれだけちっぽけでいやらしくとも、人間を選ばない」と思います」と、自分自身の結論をはつきりいって、すぐく自然を愛していくんだなあと思いました。

これからも尾瀬の自然を守り続けてください。

瀬やみんなのためにも、これからずっと守りつづけてください

尾瀬を守ろうとしたんだと思
います。私達の町には山がい
っぱいあって、木もたくさん
あります。でも尾瀬ほどでは
ありません。

尾瀬は今も守る会の人人が守
っているからだいじょうぶだ
と思います。これからも尾瀬
の自然を守ってください。

尾瀬を守る会のみなさん、長靖さんに統いてがんばって尾瀬を守っていますか。守る会のみなさんは、どうして尾瀬を守ろうとしたのですか。ぼくはそういう人を見て、すごくないなあと思いました。ぼく

の山は長靖さんのおかげできれいに美しい山になつたんだと思ひます。長靖さんが（生きて）いたら、すぐくうれしがつっていたと思ひます。ぼくも長靖さんのように、自然の喜びを忘れた人間にならないよう気を付けたいです。守る会の人たちは、これ

長靖さんが、雪の降る中で力つきてさいごの言葉「ぼくは尾瀬にうまれて本当に幸せだったよ」といつたとき、長靖さんは幸せだったんだなあと思いました。

事務局日誌

◆三月六日（日）午後二時
～五時 前橋市中央公民館
三階視聴覚教室 事務局会議
教科書会社「三村図書」が
つくった教材ビデオ、二〇
分ものを見る。これは小学校
教科書「国語六下、希望」の
「未来を見つめて
「読書」、守る、みんなの
尾瀬を（後藤充）」の副教
材。NHKのフィルムから
再構成してあり、会の入山
指導活動も収録されている。
また、愛媛県小田町参川小
学校の六年生たちは、この
「みんなの尾瀬」を劇に仕
立てて、学芸会で学年全員
参加の劇を発表している。
担任の先生がこの模様をビ
デオに納めており、そのビ
デオも見た。尾瀬から遠い
四国の少年たちが尾瀬を学
んでいる。これは日本の環
境教育が始まっていること
を意味する。

◆三月八日（火）午前十一時

群馬県庁において記者会見。
事務局の移転と会の組織・主張についてアピールした。内海代表のほか梅山、平井が対応した。

◆四月二十四日（日）「幹事会」前橋中央公民館視聴覚教室にて開催。

◆四月二六日（火）会役員挨拶

◆五月二一日（土）第一五回

三月六日（日）午後二時
～五時 前橋市中央公民館
三階視聴覚教室 事務局会議
教科書会社「三村図書」が
つくった教材ビデオ、二〇
分ものを見る。これは小学校
教科書「国語六下、希
望」の「未来を見つめて
「読書」、守る、みんなの
尾瀬を（後藤充）」の副教
材。NHKのフィルムから
再構成してあり、会の入山
指導活動も収録されている。
また、愛媛県小田町参川小
学校の六年生たちは、この
「みんなの尾瀬」を劇に仕
立てて、学芸会で学年全員
参加の劇を発表している。
担任の先生がこの模様をビ
デオに納めており、そのビ
デオも見た。尾瀬から遠い
四国の少年たちが尾瀬を学
んでいる。これは日本の環
境教育が始まっていること
を意味する。

◆三月八日（火）午前十一時

群馬県庁において記者会見。
事務局の移転と会の組織・主張についてアピールした。内海代表のほか梅山、平井が対応した。

◆四月二十四日（日）「幹事会」前橋中央公民館視聴覚教室にて開催。

◆四月二六日（火）会役員挨拶

◆五月二一日（土）第一五回

摺回わり。内海代表、梅山、
平井、青木の四人。また五
月二一日（土）の尾瀬の夕
べの宣伝に回る。東和銀行
(前橋)には入山指導パン
フレット印刷資金の供出に
対するお礼に訪問する。群
馬県庁には、新設の環境局
へ渡辺辰雄自然保護係長
に会う。新聞社関係は毎日
新聞前橋支局次長高橋和夫
氏、赤松幸司記者、朝日新
聞宮田喜好記者、読売新聞
前橋支局次席室野井隆博氏、
共同通信前橋支局長戸辺信
重氏等に会つた。また、今
度尾瀬の夕べで講演しても
らう登山家名取秀二氏の出
身校である東京農大二高を
訪問。校長後閑暢夫氏に会う。
午後、沼田に飛んで上毛
新聞沼田支局長高橋利幸氏、
読売新聞沼田通信部植田滋
記者、朝日新聞沼田通信局
佐藤清治記者に会う。おな
じみの毎日新聞吉田昌男記
者不在であったが、新任
の前橋支局長光田烈氏と吉
田氏宅の前で会つた。

◆三月八日（火）午前十一時

群馬県庁において記者会見。
事務局の移転と会の組織・主張についてアピールした。内海代表のほか梅山、平井が対応した。

◆四月二十四日（日）「幹事会」前橋中央公民館視聴覚教室にて開催。

◆四月二六日（火）会役員挨拶

◆五月二一日（土）第一五回

尾瀬の夕べ。前橋市中央公民館、約70名参加。講演は登山家・名塚秀二氏（エベレストに魅せられて）。エベレスト登頂の話をスライドをまじえながら語る。

■カンパの報告（敬称略）

松浦 聰・牛木 一朗	長井 公一・木俣 陽吉
梅山 克敏・浅子かおり	坂井 淳浩・湯浅 高行
齊藤 利夫・熊谷 瑞枝	江橋 宏栄・金谷ユキ子
高間 徳子・小野里正子	佐竹 成夫

■新入会員（敬称略）

岡安 勇三（神奈川県）	伊藤真由美（福島県）
長谷川洋子（東京都）	佐藤 英弥（福島県）
中井 恒峯（福島県）	長井 公一（福島県）
城戸 敬幸（愛媛県）	齊藤 誠（福島県）
松前 雅明（福島県）	宇津野洋一（群馬県）
荻野 正作（群馬県）	



たむしば

故牧野画伯未亡人から 多額の寄付と遺作寄贈



今春逝去された牧野正吉画伯の未亡人、宇多子氏からこのほど、守る会に三十万円が寄贈された。二月の総会には遺作の尾瀬の風景画一〇点の寄贈も受けている。

故人が静寂な美しさに魅せられ、描き続けた尾瀬がいつまでも美しさを保てますよう、との趣旨からのご寄贈で、大切に使わせていただくことにした。なお、図は夏の尾瀬ヶ原を描いた絵から作られたテレビホンカードである。

燧沼院映晉正覺居士

合掌感謝

尾瀬の自然 第69号

発行	尾瀬の自然を守る会
発行日	1994年7月1日
発行者	内海広重
編集	青木安弘、高橋喬
制作	島村恭敬
印刷	㈱マイクロ印刷
事務局	〒397-13 群馬県利根郡 月夜野町下津2953 12
電話	0278(62)1377 奥利根自然センター内

◆ひさびさの一尾瀬の夕べが前橋市で開かれ、まずまずの盛況だった。群馬の幹事の皆さん、ご苦労さまでした。事務局が地元に移って、地元の幹事や会員の意気がさかんです。東京や福島など他の地区の幹事や指導員も奮起したもの。

◆愛媛県の小学生たちが、尾瀬の自然が危機を迎えていると知つて、本会へ励ましの便りを寄せてくれました。読んでいるうち、胸が熱くなりました。この子供たちのためにも、豊かな自然を残したいのです。指導された城戸先生のお人柄もしのばれ、梅雨の晴れ間のようでした。（T）